

川崎市史市制100周年記念版

第9回 編集懇談会

配布資料

令和8年4月23日

川崎市総合自治会館

市民の意見を取りいれて、決定した構成案

N o.	構成案	コンテンツの概要
1	めくって楽しむ！ 川崎市の移り変わり	ページをめくって、100年間の川崎の地図を重ね合わせ、移り変わりを追う
2	かわさき定点観測 -100years-	7区の歴史を「場所ごと」に「写真」で振り返る
3	いつだって、川崎は 【川崎テーマ史】	メインテーマ18篇ごとに、歴史や文化を深掘り テーマ例：多摩川、スポーツ、文化、食、工業、多様性
4	かわさきと共に歩んだ ひとびとの物語	編集懇談会委員の意見を元に人選した 人物への取材を通して、背景にある歴史や文化を浮き彫り
5	市民が考えた！ 川崎【激狭】テーマ史	テーマ史より更にミクロに物事の歴史や文化を深掘り 市民ワークショップから川崎らしいアイデアを元に選定
6	地図で感じる 歩きたくなる川崎史	本を持って、まち歩きをしたくなるコンテンツ
7	数字で振り返る川崎の100年 データが示す川崎の変化	数字による、川崎の歴史や川崎らしさの提示
8	川崎の年表	テーマ史とリンクさせて通史的に整理する年表コンテンツ 興味のある事項を追える、日本史と並記など工夫を凝らす
9	かわさき歴史百景	市民から身近な歴史スポットを募集し、一人ひとりの 推しスポットをみんなで共有

以下4パートの紙面見本をお示しします

N o.	構成案	コンテンツの概要
1	めくって楽しむ！ 川崎市の移り変わり	ページをめくって、100年間の川崎の地図を重ね合わせ、移り変わりを追う
2	かわさき定点観測 -100years-	7区の歴史を「場所ごと」に「写真」で振り返る
3	いつだって、川崎は 【川崎テーマ史】	メインテーマ18篇ごとに、歴史や文化を深掘り テーマ例：多摩川、スポーツ、文化、食、工業、多様性
4	かわさきと共に歩んだ ひとびとの物語	編集懇談会委員の意見を元に人選した 人物への取材を通して、背景にある歴史や文化を浮き彫り
5	市民が考えた！ 川崎【激狭】テーマ史	テーマ史より更にミクロに物事の歴史や文化を深掘り 市民ワークショップから川崎らしいアイデアを元に選定
6	地図で感じる 歩きたくなる川崎史	本を持って、まち歩きをしたくなるコンテンツ
7	数字で振り返る川崎の100年 データが示す川崎の変化	数字による、川崎の歴史や川崎らしさの提示
8	川崎の年表	テーマ史とリンクさせて通史的に整理する年表コンテンツ 興味のある事項を追える、日本史と並記など工夫を凝らす
9	かわさき歴史百景	市民から身近な歴史スポットを募集し、一人ひとりの 推しスポットをみんなで共有

※No.1,5,7,8の紙面見本は、次回（第10回）の編集懇談会にて提示します。

見て頂きたいポイント

次ページ以降の紙面見本について

- ✓ 対象読者である、幅広い世代（特に若者世代・子育て世代）が
関心をもって読みやすい文章や表現になっているか
- ✓ 文章の切り口や表現に、市民として違和感を感じるところがないか
- ✓ 「もうひと工夫こういう言葉、表現」というアイデア

ご感想やご意見をいただけると幸いです

※「本全体のデザインに関わる内容」と「構成要素（配置されている話題）」については
これまでのご意見や議論を取り入れた結果となっており、入れ替えや変更の対応が難しいことをご理解ください

例：章の順序の変更 ／ テーマカラーの変更 ／ 構成要素の配置位置や大きさ
（多摩川のページで）花火の写真を、河原の写真に変えた方がよい
（遺跡のページで）「〇〇古墳」でなく「△△古墳」に変更した方がよい などに対応が難しいです

**本資料の紙面見本は「実物大」ではありません。
実際は、1ページが左右148mm・天地210mm(A5判)になります**

とびらページ（各パートの最初のページ）



中身ページの一部

中原区

シンボルマークの意味

「中」をベースに人と自然・文化や最先端技術が調和し、心ふれあう街への願いを表現しています。

JR 武蔵小杉駅

1927年に開業して以来、人口増加にともない利用者が増え続ける武蔵小杉駅。現在の橋上駅舎は1984年に完成しました。2010年には横須賀線ホームも開設。令和以降も駅周辺の再開発は進み、2025年現在、1日の乗車人数は10万人を越えます。

1956(昭和31)年



▲開業当初は「グラウンド前停車場」という前で、1944年に改称し武蔵小杉駅に。それまで国道409号との交点にあった「武蔵小杉停車場」は廃止となった。写真は駅前前で新築販売する女性と乗降客

撮影：田中誠 提供：朝小杉開発

1970(昭和45)年



▼高層化される前の地上駅舎とロータリー。写真後方には東急東横線へ続く連絡通路が見える

撮影：朝小杉開発 提供：朝小杉開発

▶昭和40年代、バスロータリー中央の道路側とベンチ。写真左にはタクシー乗り場、右側には東急と市営バスのバス停があった

提供：川崎市市民ミュージアム

2025(令和7)年



◀川崎市北部と南部をバスでつなぐ拠点になっている。北口の商業住宅建設など再開発が進む中、駅前広場もさらに機能的で安全に整備される予定

ブレーメン通り

1975年に組合を設立した元住吉西口商店街が、1990年にドイツ・ブレーメン市との友好提携に基づき「モトスミ・ブレメン通り商店街」に改称。元住吉駅西口から550mにわたって約180店舗が軒を連ねます。かねてより地域の人々の生活に密着した、活気のある商店街です。

1959(昭和34)年頃



▲かっぱうまの婦人が露店で買い物をしている。写真の奥方向へ通りを進むと元住吉駅に着く

撮影：田中誠

2025(令和7)年



▼通勤客や買い物客で人通りが多い商店街。かつて青果店だった場所は、書店を建てて現在はドラッグストアに

小杉十字路

1897年に中原街道と府中街道が交差してできた小杉十字路は、旅館、人力車屋、医院、郵便局などたくさんの店が集まる小杉の中心地としてにぎわいました。1913年頃には乗合い馬車の停留所もありましたが、やがて武蔵小杉駅が開業し、駅近くに商店や官公署ができると街の中心が移り、徐々に様子が変化しました。

1962(昭和37)年



▲左側が食堂、正面が寿司店。小学生が道路を渡るようとしている

撮影：田中誠

2025(令和7)年



▲付近は住宅街になっている。写真右手が川崎区方面に続く府中街道、左手が丸子橋方面へ向かう中原街道

町名の由来

小杉町(中原区)

由来は定かではないが、スギが砂地を表す意味で、これは誤解で特に意味がないと思われる。「多摩川沿岸の低地で砂地の場所」という意味ではないかとされている

025

とびらページ（各パートの最初のページ）



中身ページの一部

(まちづくり)

いつだって、川崎は 多摩川とともに生きる

川崎市民の暮らしの真ん中にある多摩川。古くはアユ漁や砂利採取で栄え、人々の暮らしを支えてきました。現在は市民の安らぎの場として、親しまれています。

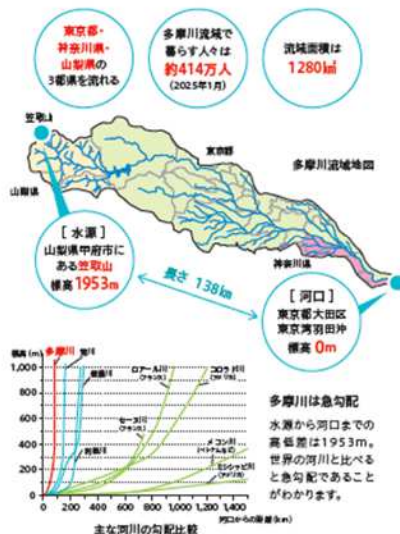


川崎市民の日常にある多摩川。河川敷で行われる花火大会は、市民が心待ちにしている年中行事のひとつです。

今でこそ市民にとっての憩いの川ですが、かつては「あばれ川」と呼ばれ、周辺に多くの被害をもたらしました。涙を流す人々が立ち上がったアミガサ事件をきっかけに、有吉堤が完成。さらに、1918年以降、下流から中流域で行われた近代改修工事のあとも、高規格堤防の整備などが行われ、安全な暮らしが整いました。近年は、多摩川とともに歩んできた街の歴史の伝承と、自然を守るための清掃や環境調査などの市民活動が積極的に行われています。昔も、今も、そしてこれからも、川崎は多摩川とともに歩んでいきます。

川崎の名前の由来となった 多摩川って、どんな川？

多摩川の河口近く、三角州の上に発展した街、川崎。川崎の「川」は多摩川、「崎」は三角州を意味し、「川崎」という地名はこの土地の地形から名付けられました。



いつだって、川崎は【川崎テーマ史】

かつて多摩川は暴れ川だった 多摩川改修の100年

散歩や子どもたちの遊足など、川崎市民に親しまれている多摩川。しかし、かつては幾度となく洪水に見舞われ、暴れ川と恐れられていました。人々の願いから始まった多摩川改修工事。その歴史を振り返ります。



- 1907(明治40)年 台風で多摩川各所の堤防が決壊し、大洪水が発生
- 1910(明治43)年 再び台風により堤防が壊れ、大きな被害が出る
- 1914(大正3)年 9月16日 アミガサ事件発生

アミガサ事件

大勢で行動することが許されなかった時代、たび重なる氾濫に苦しんでいた500人を超える人々が立ち上がり、「多摩川に一刻も早く堤防を」と決死の思いで県庁へ直訴。互いの目印になるよう顔みまをかつたことから「アミガサ事件」と呼ばれています。



- 1916(大正5)年 4月 有吉堤が完成

莫大な資金が必要になるため、なかなか事が進みませんでした。それを克服させたのが、県知事に就任した有吉忠一です。ついに長年の人々の悲願がかない、郡道をかさ上げた代用堤「有吉堤」が完成しました。



- 1918(大正7)年 多摩川近代改修工事が始まる

アミガサ事件をきっかけに、住民の声を受け、1918年から国の官庁事業として、「多摩川近代改修工事」がスタート。河口から二子橋上流までの22kmにわたって改修工事は、13年におよぶ大工事となりました。



- その後も続く 改修工事

- 1974(昭和49)年 台風で東京都側の堤防が決壊、被害拡大を防ぐため、本流を渡る二ヶ領川源流を修繕
- 1987(昭和62)年 多摩川下流部が「高規格堤防(通称:スーパー堤防)」の対象となり、整備が始まる
- 1999(平成11)年 二ヶ領川源流が改修工事により、可動式ゲートを備えたものに生まれ変わる

近年は、2019(令和元)年発生の「令和元年東日本台風」など、増加する短時間豪雨に対応するため、さまざまな対策が取られています。

町名の由来

町名(※改)

1884年、明治天皇が小向橋林に行幸されたことで「御幸村」に。その後、1932年に神奈川県川崎から川崎市に改称された川崎市の前身である川崎町となった

中身ページの一部（つづき）

いつだって、川崎は【川崎テーマ史】

**昔も今もこれからも
市民の暮らしとともにある多摩川**

豊かな漁場や砂利など、多くの恵みをもたらした多摩川。人と物をつないで川が、川崎に与えた影響は計り知れません。昔も今も多摩川は、川崎市民の暮らしに欠かせない存在となっています。

昔は人も物も舟で多摩川を渡った
江戸時代から人の往来や物資輸送の役割を担ってきた多摩川。橋がかかる以前は、横断の手段として各地に渡し舟がありました。市域では「丸子」「二子」など、20カ所の渡し場が確認されています。

アタリ

▲歌川広重「東海道五十三次之内 川崎 六郷の渡し」
提供：川崎市立図書館

多摩川の渡しが復活
渡しを後世に伝えるため、「丸子の渡し」「二子の渡し」「登戸の渡し」では、体験会を定期的に開催しています。

ダミー

▲二子の渡し体験イベントの様子

かつての多摩川の渡し場

▲六郷橋のたもとには、渡し船のモニュメントや明治天皇の渡御記念碑がある

多摩川の渡し場一覧

1 上曾の渡し(沢野口の渡し)	多摩区	11 下野毛の渡し(野毛の渡し)	高津区
2 曾の渡し	多摩区	12 宮内の渡し	中原区
3 下曾の渡し	多摩区	13 丸子の渡し	中原区
4 中野島の渡し	多摩区	14 平栗の渡し	中原区
5 登戸の渡し	多摩区	15 矢口の渡し(京市場の渡し)	幸区
6 堀の渡し	多摩区	16 小向の渡し	幸区
7 宇奈橋の渡し	多摩区	17 六郷の渡し	川崎区
8 二子の渡し	高津区	18 六郷渡し下の作場渡し	川崎区
9 鹿沼の渡し	高津区	19 大師の渡し(南渡し)	川崎区
10 北見方の渡し	高津区	20 宮田の渡し(六郷門の渡し)	川崎区

**多摩川の砂利が
関東大震災からの復興で活躍！**

江戸時代には城周辺の敷き砂利。明治時代には鉄道開通で大活躍した多摩川の砂利。さらに、関東大震災後は、東京・横浜の復興工事で大量の砂利が必要になり、需要が増加。多摩川の砂利が日本の近代化に貢献しました。

▲1925年、今の二子玉川付近で見られた砂利採取船
提供：東京電報

ダミー

**多摩川河口先の海で
行われていた海苔の養殖**

明治時代、農業の副業から発展した海苔の養殖。最盛期には地方から労働者を雇うほど盛んに。

アタリ

▲1946年、大師塩浜沖で行われていた海苔養殖の様子
提供：川崎市立図書館

**川崎の夜を彩る
川崎市制記念多摩川花火大会**

前身は六郷橋の川開き行事として、1929(昭和4)年に始まった花火大会。現在は、川崎市制施行を記念して開催され、対岸の世田谷区「たまがわ花火大会」と合同で行われています。毎年、60万人が見物に訪れます。

昔は別の場所で開催していた？

第1回は六郷橋で開催されました。その後、多摩川大橋付近で開催される時期もありましたが、1975(昭和50)年から現在の二子橋下流の多摩川河口川敷で行われています。

**汚れた川がアユの棲める川に！
多摩川の復活ものがたり**

江戸時代は上納アユとして、明治時代に入ると川船でアユ漁を行い、捕った魚を食べる遊びが人気に。ところが近代の工業化により、一時はアユの姿が消えてしまいます。しかし、下水道の普及などに伴って水質が改善され、観測を始めた1983年のアユの遡上は約18万匹でしたが、1993年には100万匹以上が確認されました。

アタリ

▲生活排水が流れ込み、池が浮かぶ1972年頃の多摩川

町名の由来 **ミヅカミ 等々力(中原区)** その昔この地域にあった「見々呂城(とどうじょう)」が転じた説、多摩川を挟んだ東京側にある不動の滝のどろくように落ちる水の音に由来している説などがある

とびらページ（各パートの最初のページ）



中身ページの一部

地場産業の伝承

盛んだった海苔作りを伝えたい

— 川崎市立殿町小学校海苔資料室 石渡 美由喜さん



小学生
記者が取材

川崎市立殿町小学校海苔資料室
石渡 美由喜さん
川崎市出身。失われゆく海苔作りの
道具類を収集し、1984(昭和59)年、殿町
小学校に「海苔資料室」を開校。海苔作り
の歴史を子どもたちへ語り継いでいる。

「学校の中に大きな舟や古い道具が！一体何に使っていたの？」小学生記者が、海苔資料室を守り続ける石渡美由喜さん取材しました。かつての街の姿と未来へ託す思いに迫ります。

「べか舟」に乗り冬の海へ
凍える寒さの中、手作業で行われた海苔作り

— 部屋の真ん中に大きな木の船があってびっ
りしました。何に使ったのですか？

「べか舟」のことですね。昔、海で養殖した海苔を
採るために使われていました。

殿町は当時、「大師海苔」と呼ばれる海苔の名産
地。香りが良くおいしいと評判でした。多摩川の河
口で海と川の水がほどよく混ざり合う地形が、海苔
の養殖にぴったりだったのです。養殖網の狭い間を

べか舟で行き来し、真冬の海に素手を入れて海苔を
摘み取ります。海苔が腐ってしまうので手袋は使え
ず、手がかじかんで感覚がなくなるほど大変でした。
採った海苔は細かく刻んで水と混ぜ、四角い枠の中



アタリ

▲1967年頃の海苔
漁の様子。海に支柱
を立て、網を張って
海苔を養殖する
風景。現在、川崎市立
ミュージアム

に薄く広げます。海苔作りは時間との戦い。お昼ま
でに干し終えなければいけません。パチパチと音が
するまで天日で乾かしたら、へらを使って丁寧に干
がしました。

海は埋め立てられ、工場の街へ
1971年、海苔作りは終わりを迎えた

— 石渡さんも、海苔作りを手伝っていたのだ
すか？

ええ、私の実家も海苔漁師でした。海苔作りは家
族みんなで行う仕事。私たち子どもも、登校前から、
海苔を洗うために水を入れたり、湿っているゴミ
を取り除いたり手伝いをしたものです。干している
海苔が風で吹き飛ばされそう時には、拾い集める
のも子どもの役目でした。



▲「甘くて香りが良く、おいしい海苔だったんですよ」と語る石渡
さん。地場産業への誇りが、現在の活動につながっている

盛んだった海苔作りですが、川崎市の発展と共
に、豊かな海は姿を消していくことになりました。殿町
を工場地域にすることになったからです。工場を建
てるために海の埋め立てが始まり、海苔を育てる場
所はどんどん減っていききました。

昔、殿町小学校の周りは田畑が多く、のどかな風
景が広がっていました。お米のほか、いちじくなどの
果物も栽培していたの。だけど、大きな工場がたくさ
ん建って、殿町の景色はガラッと変わってしまいま
した。一時期は、工場から出る排気管で空気が汚れ、
外に干していた洗濯物が真っ黒になったこともあり

町名の
由来

1927年、浅野総一郎による増設事業によって造成された「浅野家の家紋に描かれて
いる龍にちなんで命名された」といわれる

1927年、浅野総一郎による増設事業によって造成された「浅野家の家紋に描かれて
いる龍にちなんで命名された」といわれる

かわさきと共に歩んだ ひとびとの物語



貴重な道具でたどる殿町の歴史
未来を担う子どもたちに知ってほしい

— 終わってしまった海苔作りのことを伝え続け
ているのは、なぜですか？

殿町の地場産業や人々の暮らしは、大切な歴史
の1ページ。多くの人に知ってほしいのです。海苔作
りが終わった頃、道具が捨てられそうになっている
のを見て、とても寂しくなりました。そこで、殿町小
学校の先生方と一緒にリヤカーで近所や漁業協同
組合、骨とう市へ出向いて道具を集め直し、1984
(昭和59)年にこの海苔資料室を作ったのです。

以来毎年のように、子どもたちに海苔作りの歴史
や方法を伝えてきました。中には、海苔は最初から
四角い形で海に浮いていると思っている子もいま
す。昔のことは、伝え続けなければ忘れられてしま
うと痛感しました。殿町小学校の卒業生で、母校に
先生として戻ってきた方もいます。「海苔作りのこ
とを石渡さんから教わったのを覚えています」と言わ
れたときは、嬉しかったですね。

これからも、殿町の歴史が資料室を通じてみなさ
んの心に生き続けることを願っています。



▲大漁旗のほか、海苔養殖(のりず)や海苔船など、石渡さんが集
めた道具が並ぶ資料室。時代の変遷を表す貴重な資料だ

とびらページ（各パートの最初のページ）



中身ページの一部

歩いて楽しい 遺跡・古墳、 教えます

「武蔵国橘樹郡」と呼ばれた現在の川崎市域で、政治、行政、文化の中心として重要な役割を果たしたとされる橘樹郡衙。そのため、橘樹郡衙があった高津区付近では、遺跡や古墳が点在しています。散歩を楽しみながら、歴史にふれてみませんか。

印刷できる地図のダウンロードはこちら

おすすめ 散歩コース

JR南武線 武蔵新城駅

- 1 橘樹官衙遺跡群
- 2 子母口富士見台古墳
- 3 橘樹神社
- 4 子母口貝塚
- 5 壺ヶ谷古墳群

東急田園都市線 元住吉駅

武蔵新城駅からスタート。住宅街を抜けて、まずは橘樹官衙遺跡群へ。①橘樹官衙遺跡群～④子母口貝塚は高台に位置しているので、コース途中にはアップダウンもあります。マイペースで歩きましょう。

② 子母口富士見台古墳

古墳時代後期(6世紀頃)
弟橘城の衣や冠などを葬るために造られたと伝わる円墳。現存する部分は墳高17.5m、高さ3.7m。築造当初はもっと大きかったと考えられます。
国 川崎市高津区子母口54-173

徒歩約10分

お楽しみポイント

古墳の麓には大きな松の木が2本あり、春になると美しく花開きます。隣接する「たちばな」の地名は橘樹郡が由来です。

③ 橘樹神社

日本武尊と弟橘媛(左写真)を二神とする神社。尊の東征の際、姫が穴に狂う海に身を投じて、尊は無事に海を渡ったという伝説があります。
国 高津区子母口122

徒歩約5分

お楽しみポイント

境内の神文は、神代文で書かれた人でもあった山崎氏の墓によります。山崎氏の墓には「日本武尊の姫」と記されています。

スタート JR南武線 武蔵新城駅

徒歩約20分

① 橘樹官衙遺跡群

飛鳥～平安時代(7～10世紀頃)
古代橘樹郡の役所跡である千年伊勢山台遺跡(橘樹郡家跡)と影向寺遺跡で構成される遺跡。橘樹歴史公園として一般公開されています。
国 高津区千年伊勢山台423-1ほか

お楽しみポイント

▲地中に保存される倉庫跡4基は、稲(粟など)を納める正倉院だった。うち1基は金庫を復元

お楽しみポイント

▲倉庫の穴井、堀を掘り大溝をのり、溝を掘って再び、飛鳥時代の倉庫の復元は完成

お楽しみポイント

▲倉庫の跡の横など、可変な掘り出し物の技術や技法を駆使して復元。通称は「橘樹公園」ですが、不実態で閉鎖に公開されます。

④ 子母口貝塚

縄文時代早期後半(8100年前頃)
多摩丘陵上で最古級の貝塚。マガキなどの貝とともに魚や獣の骨なども見つっています。現在は子母口貝塚公園として整備されています。
国 高津区子母口5-148ほか

お楽しみポイント

▲公園には、貝殻や貝殻の骨の骨がわかる解説板も設置。海の恵を受けて暮らしていた縄文人の生活が想像できます。

千年伊勢山台遺跡【橘樹郡家跡】

郡家(郡以下の役人が政務を執った役所)の跡。租税を納める倉庫だった正倉院であったことが確認され、その西側には、郡家関連と思われる大型建物群があったことがわかってきました。

影向寺遺跡

古代影向寺の跡。境内からは造営や修理にあたって、武蔵国府が管理する多摩郡跡群で生産された瓦が利用されていました。当時、南武蔵国の中心的な寺院であったことが想像されます。

お楽しみポイント

▲影向寺の創建は8世紀前半頃とされ、7世紀末頃、倉庫が敷設されたのが始まり

お楽しみポイント

▲影向寺は現在の橘樹郡とは同じ位置に、7世紀末頃、倉庫が敷設されたのが始まり

⑤ 壺ヶ谷古墳群

古墳時代後期(6～7世紀)
この地の有力豪族の墓と考えられる古墳群で、神奈川県のなかにあります。うち1基は全長30m、高さ2mで、市内に数える唯一の前方後円墳です。
国 高津区壺ヶ谷97-5

お楽しみポイント

▲全長30mの前方後円墳は、市の古代史の解説につながる大発見。神奈川県の歴史をよると見事らしいのいい景色も楽しめます。

ゴール 東急田園都市線 元住吉駅

中身ページの一部（つづき）

川崎市には、まだまだ 遺跡・古墳があります

古墳時代に東アジアで勢力を伸ばしていた中国の影響は、当時日本の中心だった飛鳥地方から遠く離れた現在の川崎にも及びました。今でも、古代の人々の生活がわかる遺跡や、豪族が埋葬されたとみられる古墳が市内各地に残っています。古代川崎の魅力にふれてみましょう。

河原石を使った縄文時代の配石遺跡

① 仲町遺跡

縄文時代中期末(4000年前頃)

半地下式の竪穴の床面に平たい河原石を敷き詰めた住居跡。土器のほか、石斧、石皿など生活用具も発掘されています。
① 麻生区片平3-27-1
② 小田急麻生駅から徒歩15分



▲麻生区の片平中町運動公園内にある

法隆寺夢殿と同じ八角円堂の遺跡

② 宮寺尾古墳群(宮寺尾古墳)

奈良時代(8世紀中頃)

建物の基礎部の八角形を復元。建物も八角形だったと推測され、供養堂という説や公的役割をしていた説があります。
① 多摩区寺尾台2-8-3
② 小田急武蔵小田駅南口からバスで武蔵小田下車、徒歩3分
または小田急生田駅から徒歩20分



▲寺尾台地の公園内にある。復元に使われた軒瓦も発掘

泥岩の版室墓に覆われた墓

③ 生田長者穴横穴墓群

飛鳥時代(7世紀中頃～後半)

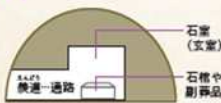
生田緑地の版室山の北麓にある横穴墓群で、計32基の横穴墓が群集。横穴墓とは斜面に横穴を掘り死者を埋葬する墓です。
① 多摩区東生田1-7-11
② 小田急向ヶ丘遊園駅から徒歩9分



▲東生田という更紗の地名に覆われた奥の5m、幅3mほどの横穴

横穴墓はこんな構造です

遺骸を安置する石室とそこに通じる狭道からできています。生田長者穴横穴墓群からは、青や黄のほかに金銅など副葬品も出土。



④ 県立東高校森林公園 では出土品を展示

弥生～古墳時代の竪穴住居跡と、貴重な植物群落、シラカシ林の保護のため、県立東高校森林公園が開園。史跡および天然記念物に指定され、園内パークセンターでは出土品が展示されています。
① 国府前区神木本町2-10-1
② JR久地駅から徒歩14分
東高校のシラカシ林→P.137



▲アタリ

保存区がふじやま遺跡公園内に

⑤ 長尾台遺跡

縄文時代前期(1万～8000年前頃)

細長い舌状台地にある遺跡。発掘調査によって、縄文、弥生、古墳時代の竪穴住居跡(左写真)やかまどの墓などが発掘されました。
① 多摩区長尾6-11(ふじやま遺跡公園内)
② 小田急向ヶ丘遊園駅からバスで長尾下車、徒歩8分
またはJR久地駅から徒歩20分



▲約4～5m内の縄文時代前期の竪穴住居跡も発掘

標高約46mの台地上の縁辺部に立地

⑥ 西橋寺古墳

古墳時代後期(5世紀後半～6世紀初頃)

直径約35m、高さ約5.5mの円墳。墳丘の周囲には溝跡が巡っていて、その中から埴輪のかげらが大量に発見されました。
① 高津区西ヶ谷3-17
② 東急西ヶ谷駅からバスで西ヶ谷5丁目下車、徒歩5分
または東急西ヶ谷駅から徒歩14分



▲西ヶ谷3元公園内に保存されている

高い文化レベルの有力豪族の墓か

⑦ 鳥羽古墳

古墳時代後期(7世紀後半)

玄室・前室・後室からなる大型の横穴式石室がある円墳。築造技術や装飾方法には、朝鮮半島の古墳の影響が見られます。
① 国府前区鳥羽994-10
② 東急国府前駅からバスで金山下車、徒歩5分



▲鳥羽古墳の史跡で、鳥羽古墳公園として整備

矢上川流域の豪族たちの埋葬地

⑧ 加瀬台(夢見ヶ崎)古墳群

古墳～飛鳥時代(4世紀後半～7世紀後半)

11基の古墳や塚が残る古墳群。白山古墳は武蔵国で最も古くの大形の前方後円墳で、青銅製の三角縁神鏡(右写真)が出土しました。
① 中央区北加瀬1-13-1ほか
② JR川崎駅西口からバスで夢見ヶ崎動物公園前下車、徒歩7分
またはJR新川崎駅から徒歩12分



▲開口している加瀬台古墳群第3号墳

町名の由来

南加瀬(●区)

『風土記』によると、加瀬(加瀬)という人物が山崎の加瀬川から移り住み、この地を加瀬に改めたとされるが、真偽は定かではない。加瀬山の頂上で北加瀬と南加瀬に分かれる